

福島訪問記

アミルタラジ・スティブン氏

(インド・フォトジャーナリスト)に同行して

コアネット代表 遠山勝博

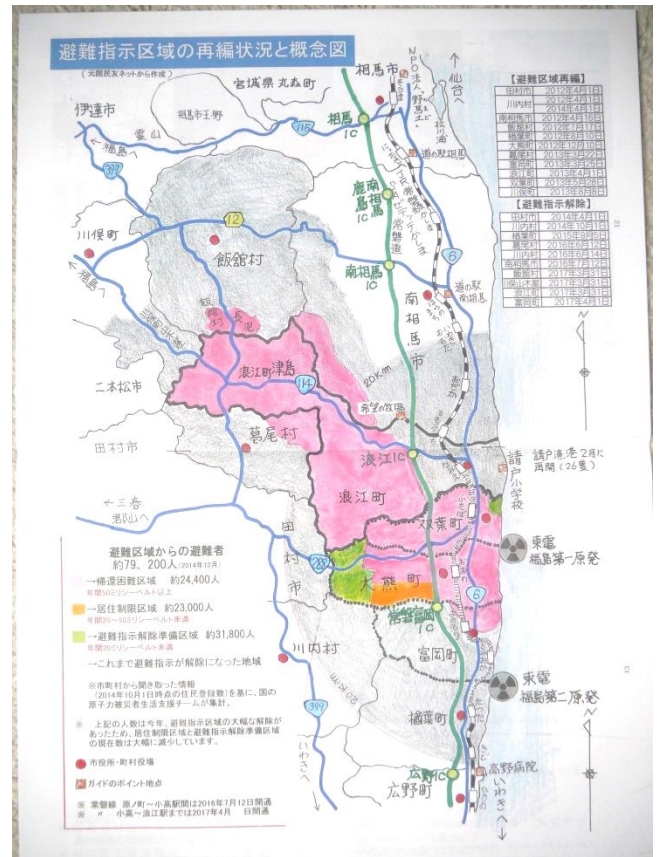
7月31日から8月4日、インドのフォトジャーナリスト アミルタラジ・スティブン氏とともに福島の帰還困難区域周辺を訪問した(下のスケジュール表と『野馬土』作成の地図を参照)。同行したのは、私(遠山勝博)と井上浩氏、福永正明氏(8月1日夜から)である。

スティブン氏の福島再訪の希望は、①彼が昨年3月に福島で開催されたノーニクス・アジアフォーラムにインド代表の一人として招へいされた際、飯館村や南相馬市、富岡町などを廻って写真を撮ったが、それらの地域が1年余を経てどう変わっているのかを取材したいということ②福島県立医大に行き、医師から甲状腺がんなどの放射線による疾病の状況を聞きたいということであった。その理由が、インドでは、福島第一原発事故による放射線被害はないという福島県立医大の見解が「通説」としてまかり通っているからだということであった。

(1) 再訪、1年余の変化を記録

彼の記憶に基づいて、飯館村、南相馬市、富岡町などの撮影ポイントを再訪し、その変化を記録した。

① 7月31日の午後、飯館村では独自に昨年の撮影ポイントを回るとともに、8月1日の午前中に「いいたてふぁーむ」の伊藤延由氏の案内で村内を見回った。スティブン氏は、新たに建設・拡張されているフレコンバックの広大な仮置き場や、高線量で居住できない土地に続々と建設されているソーラー発電パネル、村人の帰還を促すために巨額の補助金を投入して建設が進められている学校や陸上競技場などを撮影した。彼は「昨年はまだ寒い時期で荒涼としていたが、今回は田や畑が緑に覆われていて大きな変化を感じた」と言っていた。



② 8月3日に放射線被害の様子を如実に示す場所として、強いショックを受けたという常磐線富岡駅を再訪。昨年は、壊れた駅舎の周辺にまったく人がなかったのだが、旧駅舎が取り壊され、新しい駅の建設が急ピッチで進められていた。その著しい変化を見て非常に驚き、盛んにシャッターを押していた。



(2) 福島第一原発の遠景を撮影

一部公開され始めている第一原発の中に入って撮影したいという希望もあったが、それは無理だった。そこで、可能な限り近くから外観を撮影することにした。

① 8月2日、特定非営利活動法人「つながっぺ南相馬」理事長の今野由喜氏に案内してもらい、約7キロ離れた請戸漁港から遠景を撮影した。



③ 8月3日には、特定非営利活動法人「野馬土」代表理事の三浦広志氏の案内で、相馬市から常磐道で相馬インターから常磐富岡インターまで南下し、富岡から国道6号線で帰還困難区域（年間50ミリシーベルト以上）大熊町、双葉町を突っ切って相馬市に戻るツアーを実施した。その際、6号線上に車を止め、最も近い距離（約2キロ）から第一原発の外観を撮影することができた。交通量が少なかったのが幸이었다。



(3) 「放射線被害はない」という福島県立医大論文への反論を聞く

① この問題については、「2017ZENKO in 東京」(7月29日～7月30日)の期間中に、ZENKO(平和と民主主義をめざす全国交歓会)の構成団体である医療問題研究会(この団体の立場は2011年11月1日に1日に耕文社から発刊された『低線量・内部被曝の危険性—その医学的根拠—』に詳しく述べられている)の医師2人と長時間にわたって意見交換した。医師らからは福島県立医大見解の問題点について丁寧な説明を受け、それを裏付ける英語の論文・資料等の提供を約束してもらった。

② 一応の予備知識を持った上で、8月1日に福島を訪れた。「ふくでん」の藤岡事務局長、竹内代表は、同団体の役員でもある「311甲状腺がん家族の会」代表世話人の千葉親子氏(元福島県会津坂下町議)の講演を準備してしてくれた。彼女はパワーポイントを使って、福島県立医大の見解(原発事故による甲状腺がんの多発はない)に対する的確な批判を行うとともに、がんを発症した子供達と家族への支援活動の現状を報告してくれた。長時間の通訳には藤岡氏に当たっていただいた。



これらの説明を通じて、スティブン氏はインドにおいて流布されている「福島第一原発事故による放射線被害はない」という見解の誤りを確信しただろうと思う。

（４）帰還をめぐるインタビューと小高駅周辺、請戸漁港などの状況を撮影

① 8月2日に「つながっぺ」の今野由喜氏から、同法人が運営する「陽だまりサロン紅梅」で約2時間お話を伺った。

彼は昨年7月に避難指示が解除され、住民の帰還が徐々に進められている南相馬小高区塚原行政区長でもある。今野氏は、震災・津波被害・原発事故の当時の状況から現在に至る状況について、質問を整理しながら話をしてくれた。特に帰還者については、避難者1万2千8百人のうち、解除時には600人余が帰還。そして来年3月に仮設住宅制度が終了するのを前に、直近では2000人余になった。またこの間の大きな変化は、常磐線が小高駅から浪江駅まで延伸し、運行時間が拡大したことと、今年4月に小、中、高校が再開したことにより、地域に活気ももどってきたなどである。しかし、帰還者の大半は高齢者であり、幼い子供を抱える家族は戻ってきていない。家族がバラバラになるなどの問題が深刻であることが報告された。今野氏は「住民はほとんどが帰還には反対だが、同じ反対でも色々な側面がある。自分は県外に出た人たちにも故郷を残したい。代を繋ぎたいという立場で町の再建に当たるが、子供達に帰還を強制するつもりはない。」と言っておられた。スティブン氏は、通訳されたこれらの言葉を、びっしりとノートに書き留めていた。



インタビューを終了してから、今野氏は小高区周辺を案内してくれた。「希望の牧場」、福島第一原発が遠望で

きる請戸漁港、そして彼が住んでいた住居跡など。



③ 8月3日、NPO 法人「野馬土」代表理事の三浦広志氏の案内で福一から「20キロ圏内」ツアーを実施した。「野馬土」は20キロ圏外の相馬市にあり、「道の駅」のような造りで無農薬野菜の販売店や喫茶店などがある。若いスタッフが多く、ボランティアも参加して活動しており活気があった。三浦氏に車に乗ってもらい、車中で話を聞きながらツアーを開始。相馬インターチェンジから高速に乗り、常磐富岡インターで降りて富岡駅に行き、帰路は6号線で北上し最後は小高区の三浦氏の元住居一帯を案内してもらった。往路、復路で浪江町と双葉町を通過したが、その際は車内でも線量が2マイクロ近くになり、道路脇のモニタリングポストは4マイクロ近くを表示していた。道路わきに広がる林の中はもっとも線量が高いとのこと。車中で三浦氏は「これでもだいぶ下がった方です。私はここを通りたくない」と帰還の困難性を強調していた。彼の元住居一帯は津波ですべての家が押し流されたが、住民で話し合いを続けてメガソーラーを誘致して土地の活用をはかることにしたとのことである。彼のように、放射線の影響が少ない地域に転居し、新たな生活を築いている人々もいることがスティブン氏にも理解できただろうと思う。



④ 私たちは8月2日から2日間小高駅前の双葉屋旅館に宿泊した。この旅館は避難指示解除直後に営業を再開したが、除染作業に従事する労働者や、学生ボランティアたち、そしてそれ以外の宿泊者が混在して泊まっていた。経営者のご夫婦は「政府はここに除染土を永久に置いておくつもりだ」と怒り、撮りためたたくさんのビデオ（英語版を含む）を一緒に見ながら自分たちの活動を説明してくれた。

⑤ 8月3日の午後、私たちだけで小高地区を調査。幼稚園、小中学校、高校の訪問を皮切りに請戸漁港を再訪問した。ステファンは時間をかけて撮影。



その後、旅館に戻り、薄暗くなるまで各自自由行動。私は一人で駅近くの街の様子を見て回った。目抜き通りでは郵便局や銀行、コンビニ、鮮魚店、金物屋などが営業し始めていたが、庭に除染土がおかれたままの家や門柱だけが残った工場跡、空き地の小規模なソーラーパネルなども混在し、中心部を離れると空き家、空き地が目立つ状況だった。



（５）帰還困難区域が交通を分断

① 常磐線は浪江駅から竜田駅間が不通。第一原発近くの線量が高い区間はコンクリートのトンネルで覆って開通させようとしているが、本当に大丈夫だろうか。無理やり「復興」を演出しているように思えてならない。



② 8月4日、小高から郡山市に隣接する三春町に向かうが、浪江インターチェンジから常磐自動車道に入り、いわき中央まで南下。そこから磐越自動車道に移り、船越三春インターで降りる「大迂回」をした。帰還困難区域の通行止めを避けるためやむを得ないルートだが、高速道路を使わない地元の人たちはもっともっと時間がかかる。

③ 高線量の道路は高速で通過すれば被ばくは少ないが、事故などで高線量エリアに車が長時間留まった場合、高い線量を浴びる。「無理やり」の「開通」と帰還の促進は問題だと思った。

